

埼玉県立
歴史と民俗の博物館



彩の国埼玉県

THE A MUSEUM

Vol.16-1 第46号 2021.10.8

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

特別展

埼玉考古

博物館開館50周年

選

令和3年 10.9土 - 11.23火・祝

休館日 ▶ 月曜日(ただし11月1日、22日は開館)
時間 ▶ 9:00~16:30(観覧受付は16:00まで)
観覧料 ▶ 一般600円、高校生・学生300円
常設展観覧料を含む
中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方(付添1名)は無料
(くぐるっとパス2021)で観覧できます

現在の埼玉県に人々が住み始めたのは、今から約35,000年前の旧石器時代のことでした。埼玉県内では、旧石器時代から近現代に至るまで、数多くの遺跡がこれまでに調査されてきました。本展では、調査で発見された考古資料の中から、重要文化財、県指定文化財を中

心とした優品を厳選して展示します。

今年は、昭和46年(1971)に埼玉県立博物館として開館してから50周年にあたります。50周年にちなみ、各時代を代表する考古資料を50のテーマに基づいてわかりやすく解説します。

第1章 旧石器時代

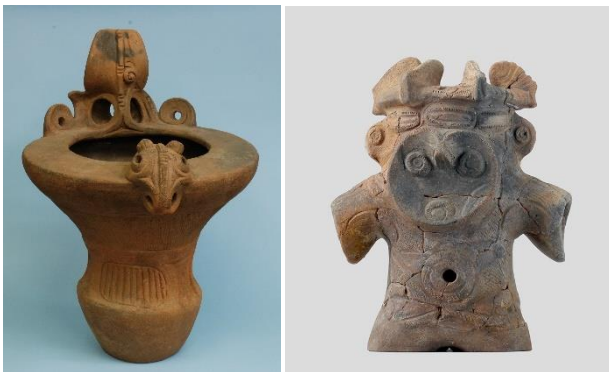
この時代の遺跡からは住居跡や墓などの遺構はほとんど見つからないため、人々の生活の様子を知る上では、出土した石器が重要な手がかりとなっています。本章では、これまでの研究によって明らかにされてきた、石器の作り方、他地域からの物資調達や製作技術の交流などを紹介します。



石器 せいがんじまへら 清河寺前原遺跡(さいたま市)
(埼玉県教育委員会蔵)

第2章 縄文時代

土器の出現を一つの契機として、縄文時代が幕を開け



右:土偶 おばやしはっそく 小林八束1遺跡(久喜市)
(埼玉県教育委員会蔵)

左:埼玉県指定文化財 装飾付深鉢形土器
はねさわ 羽沢遺跡(富士見市)
(富士見市教育委員会蔵)

ました。煮炊きが可能となったことで食物の選択肢が広がり、栄養摂取の効率も向上しました。これによって、獲物を求めて広範囲を移動する生活から、定住生活へと変化していきました。また、生活の安定や気候の温暖化を背景として、土偶や貝塚など、縄文時代に特徴的な諸要素も出現しました。

関東平野の中央に位置する埼玉領域は、様々な地域から伝わってきた情報が入り混じる場所でした。土器や土偶などの様々な道具からは、日常生活の様子だけでなく、人々の精神世界も垣間見えます。

第3章 弥生時代

弥生時代と言えば、稲作の開始によって社会が一変したというイメージがあるかもしれませんが、しかし、関東地方を含む東日本には、弥生時代前期になっても縄文時代以来の伝統が強く残っていました。埼玉領域で稲作が始まったのは、北部九州で稲作が始まってから数百年遅れた、弥生時代中期になってからのことでした。この時期の遺跡からは、大陸から伝わってきた石器や金属製品、土器に残された稲粃の痕跡など、関東地方への弥生文化の本格的到来を示す資料が発見されています。

弥生時代前期から中期にかけての特徴的な墓制である「再葬墓」の資料と合わせ、東日本に展開した特徴的な弥生文化の形を紹介します。



ませいせきふ 磨製石斧 むかいやま 向山遺跡(朝霞市)
(朝霞市教育委員会蔵)

第4章 古墳時代

古墳時代になると、道具や文化に畿内地方や東海地方の影響が強く見られるようになります。こうした動きからは、東日本も畿内を中心とした統一政権の体制下に組み込まれていったことがわかります。

県内でも古墳が盛んに築造され、埴輪、武器、馬具などの出土遺物からは、各地の有力者の姿が見えてきます。個性豊かな埴輪の造形にもぜひ注目してください。



重要文化財 馬形埴輪・馬曳き
酒巻 14 号墳(行田市)
(行田市郷土博物館蔵)

第5章 古代

大宝元(701)年の「大宝律令」制定などを経て、中央集権の国家体制が成立しました。全国は約 60 の国に分けられました。現在の埼玉県の大部分は武蔵国の北半分にあたります。都が置かれた畿内とは道路網によって結ばれ、地方の支配を司る「官衙」(役所)が各地に設置されました。

官衙やその周辺に所在する遺跡の調査成果からは、官衙の実態をうかがうことができます。また、寺院や集落からの出土遺物には、人々の生活の中に次第に仏教が浸透していったこともわかります。



重要文化財 瓦塔・瓦堂 東山遺跡(美里町)
(埼玉県教育委員会蔵)

第6章 中世

中世には板碑、宝篋印塔などの石塔が出現し、供養のために盛んに造立されました。石塔や埋葬された蔵骨器は、年代がわかるものや具体的な人名等が書かれているものも多く、歴史的な事象を考える資料として価値が高いものです。

戦国時代に築かれた城館からは、日常生活の道具の他、戦の激しさを生々しく伝える武器、武具なども出土しています。



市指定文化財 十六間筋兜 騎西城跡(加須市)
(加須市教育委員会蔵)

第7章 近世

近世以降の遺跡を対象とした発掘調査は他の時代に比べると少ないものの、その事例は着実に増加しています。調査の進展により、県内各地の歴史を考える上で大きな意義を持つ成果が見つかっています。

特に、近年継続的な調査が実施されている栗橋宿跡は、宿場を広範囲にわたって調査した全国的に見ても重要な調査例です。

本展で展示する資料は、地域の特色や人々の生活の移り変わりなどをよく示しており、いずれも埼玉の歴史を考える上で欠くことのできない重要な価値を持つものです。各時代の多種多様な資料を通じて、かつて埼玉の地で暮らした人々に思いを馳せていただければ幸いです。

(展示担当 堀口智彦)



『平家物語』と並び、日本の軍記物語の双璧として名高い『太平記』。この物語を、極彩色の絵巻に仕立てた現存唯一の作品が太平記絵巻です。

太平記絵巻は全12巻からなり、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーで2巻、国立歴史民俗博物館で3巻の所蔵があります。そして、当館で最多の5巻(巻第一、第二、第六、第七、第十、すべて埼玉県指定文化財)を所蔵しています。昭和47年(1972)に巻第一を購入して以来、埼玉県ゆかりの貴重な文化財として、また地域の宝として、多くの方々に愛されてきました。本展では17年ぶりに当館所蔵の5巻を一挙に公開し、改めて太平記絵巻の魅力を紹介いたしました。本稿では、企画展「太平記絵巻―描かれた武士の世界―」を振り返ります。

I 『太平記』の時代



I 『太平記』の時代 展示風景

日本の南北朝時代の争乱を描いた『太平記』は、四十巻からなる壮大な物語です。後醍醐天皇の即位から始まり、50年にも及ぶ諸氏の果てしない戦いを描きます。そこには、内乱期のさまざまな人間像を鮮やかに描き出しています。本章では、『太平記』を紹介するとともに、そこに描かれる争乱の時代について、同時代を語る資料とあわせて紐解きました。

さらに、『太平記』に登場する人物のうち、後醍醐天皇、楠木正成、新田義貞、足利尊氏を取り上げ、ゆかりの資料も紹介しました。それぞれに印象的なエピソードを持つ

四者ですが、特に義貞は埼玉県にもゆかりが深く、当館の常設展示室第6室で複製を展示している「元弘の板碑」(入間市円照寺蔵)にも見えるように、元弘3年(1333)の鎌倉攻めの際に県域も戦場となりました。

太平記絵巻をいっそう楽しんでいただけるよう、古文書や版本、絵画などとおして、『太平記』の時代を少しでも感じていただけたら幸いです。

II 太平記絵巻

『太平記』のような軍記物語を、絵巻物の形式で表したものを合戦絵巻と呼びます。その系譜に連なる作品が太平記絵巻です。作中には、壮大な物語を彩る武士たちの活躍も鮮やかに描かれます。本章では、当館所蔵の太平記絵巻を一挙に公開し、そこに描かれた武士の世界を詳しく紹介しました。

当館所蔵の5巻の太平記絵巻の全場面を、3期に分けてご紹介する本章は、本展のメインです。物語もあわせて楽しんでいただけるよう、場面ごとに解説を付しました。その内容もさることながら、ぜひ注目していただきたいのは太平記絵巻の絵画のディテールです。例えば、有名な「無礼講の場面」(図1)。後醍醐天皇が倒幕計画を練るために開いたとされる宴のシーンです。美しい女性をはべらせて、酔いのあまり正体をなくしている人々の姿も見えます。さらにじっくりと絵を見ていくと、左



図1 埼玉県指定文化財 太平記絵巻(当館蔵)
巻第一 第5紙(部分) 無礼講事



図2 無礼講事 人物図拡大

上半眼でつろぐ青い衣の人物の姿が見えます。目の下をはじめ顔がほんのり朱に染まっている様子が描かれているのです(図2)。お酒をたしなむ方ならおわかりかと思いますが、恐らく無礼講の宴で酔っ払った人物を表しており、繊細な彩色によって巧みに表現されていることがうかがえます。これは、本作品における細部まで神経の行き届いた見事な描きぶりのほんの序の口に過ぎません。太平記絵巻は、複雑長大な『太平記』を絵画化した無二の作品として名高いものですが、武装した武士の姿はもちろん、調度や市井の人物、自然の風景に至るまでの、細やかな表現こそが絵巻の白眉はくびと言えるでしょう。

Ⅲ 『太平記』をめぐって



図3 太平記理尽図経 (当館蔵)

第3章では、太平記絵巻にとどまらない、『太平記』がさまざまな文化的事象にもたらした影響を紹介しました。江戸時代になると、『太平記』の注釈書が出版され、それを専門に読み聞かせる者も人気を博しました。広く人々に知られた『太平記』は、近世文化全体に影響を及ぼします。本章では、『太平記』の注釈書をはじめ、それ

に影響を受けた錦絵や人形浄瑠璃じょうるり・歌舞伎の演目などを多彩な資料をもとに紹介しました。特に絵入りの注釈書である「太平記理尽図経」(当館蔵、図3)は、江戸時代初期の写本で、『太平記』に描かれる戦の詳細やその地形について解説したもので、同様の資料の中でも制作の古い貴重なものです。

Ⅳ 太平記絵巻の装(い)・(風)景・(道)具

本展では、さまざまな方に展覧会を楽しんでいただくために、太平記絵巻に登場するものをモチーフにしたキャラクターを制作しました。太平記絵巻巻第二第8紙の北条高時天狗舞に登場する「異類の者」から、「テンちゃん・オニちゃん・ウサちゃん」の「てんぐまい3人衆」がナビゲーターです(図4)。それぞれのイラストを目印に、絵巻に描かれた人々の装い・風景・道具が、実際にあったらどのようなものなのか、どのようにして描かれたのかをご覧いただけるよう、本章では江戸時代を中心とした資料を展示会場の各所で紹介しました。



図4 展覧会オリジナルキャラクター「てんぐまい3人衆」
左からテンちゃん・オニちゃん・ウサちゃん

本展では、とりどりの資料をとおして太平記絵巻の魅力を広く紹介しようと試みました。ご覧いただいた皆様に、少しでもその豊かな世界をお伝えできていれば、当館として望外の喜びです。

(展示担当 西川真理子)

あ い 愛 アイ I LOVE 藍！藍の他愛もない話

* 埼玉の藍染め

令和3年(2021)の大河ドラマ「青天を衝け」で、渋沢栄一の故郷・血洗島の人々が藍色の着物や手拭いを身に着けていました。若き日の栄一が藍葉の買い付けに行ったり、藍玉の番付を作ったりしていたシーンが印象に残っている方も多いのではないのでしょうか。藍といえば阿波藍(徳島県)が有名ですが、埼玉県域でも江戸時代中期～明治時代にかけて藍の栽培や染色が盛んに行われていました。現在では、藍の葉を発酵させて作った天然の染料で染めた「武州正藍染」や、繊細な型紙を用いて模様を染め抜く「長板中型」が埼玉県の伝統的手工芸品に指定されています。

さて、この伝統ある埼玉の藍染め、当館で手軽に体験できるのをご存じですか。40～50分であっという間に藍染めの木綿ハンカチが完成！手ぶらで参加でき、その日のうちにお持ち帰りいただけるので、どなたでもお気軽にご参加いただける人気の体験メニューです。ここでは、普段はお伝えしきれない、藍染め体験担当学芸員の「藍への愛」をお届けします。はじめての方はもちろん、経験のある方も、また染めてみたくなること間違いなし！

* れきみんで藍染め体験！

歴史と民俗の博物館にあるゆめ・体験ひろばの「ものづくり工房」には3つの大きな藍がめがあります。

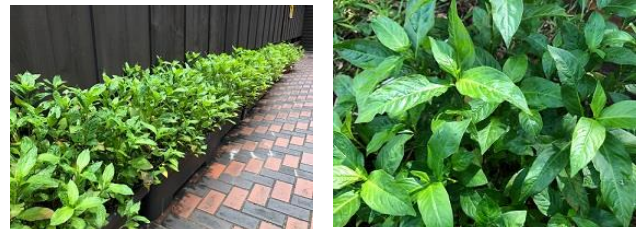


今日は1番のかめ、明日は2番のかめ、というように、順番に使います。毎日同じかめを使うと藍が疲れてしまい

染まりが悪くなるので、お休みの日をつくっています。毎朝試し染めをして染まり具合を確認し、「今日は3番のかめで2分間染める」とか「今日はちょっと色が薄いので、1番のかめで2分半染める」とか、藍がめをいたわりながらちょっとしたやりくりをしています。

* 藍より出でて…？

ものづくり工房に隣接した昭和の原っぱでは、実際に藍(蓼藍)の栽培を行っています。



葉っぱは緑色なのに、ハンカチは藍色に染まるのが不思議ですよね。この葉っぱにはインディカンという青色のもとになる成分が含まれており、この葉を刈り取り、乾燥→発酵→材料を加えて攪拌することによって、染料ができます。緑色をしていた藍の葉っぱから青色が生まれる一まさに「青は藍より出でて藍よりも青し」なのです。

* 愛情込めてかき混ぜ中

お客様が帰ったあと、ものづくり工房にはゴリゴリと不穏な音が響き渡ります。その日体験に使った藍がめに消石灰を入れて攪拌しているのです。



こうすることによって、藍の液をアルカリ性に保ち、染めの状態を維持することができるのです。ちなみに、藍がめの深さは1mほど。これを長い棒で1日に50～200回かき

混ぜるのはかなりの重労働ですが、毎日愛情込めて藍のお世話をしています。

学芸員の「藍への愛」がお分かりいただけたでしょうか。藍は染料だけでなく、食用や薬にもなります。まだまだ奥が深い藍の世界。まずは気軽に、博物館で藍染め体験してみませんか。愛情をたっぷり注いだ藍がめとお待ちしています！

歴史と民俗の博物館公式 YouTube

「藍染め動画～藍の成長日記☆～」も公開中！



(学習支援担当 黒田千尋)

資料「活用」の仕事 —特別利用の現場から—

はじめに

当館には、「資料調査・活用担当」という部署があります。「資料」は、所蔵している資料の保存についての仕事、「調査」は、資料にかかわることや、県内の歴史や民俗を調べる仕事、とイメージされるのではないのでしょうか。では、「活用」は？

活用というと、資料を展示して見てもらう、図録を作る、といったことを思いうかべるかもしれません。しかし、活用の場面はそれだけではありません。

当館には、所蔵資料を活用していただくための「特別利用」というメニューがあります。特別利用には、①熟覧（資料の調査）、②模写・模造、③撮影、④原板使用という種類がありますが、今回は、特に利用の多い原板使用について紹介し、当館が所蔵する資料がどのように活用されているかをお伝えします。

1 原板使用とは？

当館が所蔵する資料の画像などを書籍や図録に載せたい、あるいはテレビ番組などで放送したい、といった方向けの手続きが「原板使用」です。

「原板」とは、フィルムを指します。以前は、資料を写したフィルムの現物を貸し出していたため、この呼び方をしています（現在は、電子メール等を使い、デジタルデータで提供することがほとんどです）。

当館では、出版社やテレビ番組の制作会社、博物館などから、年間100件程度、原板使用の申請を受け、画像を提供しています。

2 人気の画像は？

令和2年度に当館が提供した画像のうち、もつとも数が多かったのは、軍記物語『太平記』を色彩豊かな絵巻に仕立てた「太平記絵巻」(17件)でした。

「太平記絵巻」は、南北朝の動乱を中心に、武士や公家などさまざまな人々が縦横無尽に活躍する姿を描いた作品です。世界中で当館だけが所蔵する巻第一、二、六、七、十の原本には、新田義貞や楠木正成、足利尊氏など名だたる武将が登場することもあり、歴史のみならず、文学の書籍等にも多く載せられています。

次いで多かったのが、幕末のペリー来航の様子を描いた「黒船来航風俗絵巻」(8件)です。嘉永7年(1854)に再び来航したペリー艦隊の蒸気船の姿や艦隊を迎える

様子がよくわかることから使われるようです。

また当時、地震を起こすと信じられていた^{なまず}鯨を題材にして、安政江戸地震(安政2年(1855))の後に出版された浮世絵(鯨絵)も、当館では約150点所蔵しています。これらも、問い合わせをいただくことのある、当館自慢のコレクションのひとつです。



鯨絵(切腹鯨金千両)

切腹しておなかの中から金をたくさん出すナマズを見て、人々がナマズを許そうとする様子を描いています。

書籍や図録に載せられた画像には、多くの場合、どこから提供を受けたかを示すクレジットが書かれています。当館のクレジットを見つけたときには、「こういう資料を所蔵しているのか」と知っていただければ、うれしいかぎりです。

おわりに

特別利用は、主に学術研究や出版・放送などを目的とした手続きですが、当館がどのような資料を所蔵しているかは、インターネット上の「埼玉県立の博物館施設収蔵資料データベース」から、どなたでも検索することができます。URLは次のとおりです。

<https://jmaps.ne.jp/saitamarekimin/index.html>

このデータベースは、当館に加えて、埼玉県立さきたま史跡の博物館、埼玉県立嵐山史跡の博物館、埼玉県立川の博物館が所蔵する資料も検索することができます。ぜひ一度、アクセスしてみてください。

(資料調査・活用担当 鈴木一史)

博物館実習の日々

今年度、当館では、6月17日(木)～25日(金)(計6日間)に博物館実習を実施しました。今年もコロナ禍ということで、例年とは異なる実習となりました。実習生の人数を制限し、消毒などの基本的な感染対策を徹底したうえで、実施しました。

当館の実習は、資料の取扱いや展示演習以外に、体験学習を実際に体験してもらったり、広報について考えたりと様々な業務に取り組んでもらいます。

初日は各担当の事業概要の説明や保存環境に関する講義や、館内の見学など座学が中心です。実習生も職員も初めて顔を合わせたため、緊張感が溢れた1日となりました。

2日目から具体的に実習がスタートしました。まずは当館の体験学習であるまが玉作りや藍染めを体験してもらいました。最初は体験を楽しんでいた実習生ですが、体験の改善点の話し合いになると真剣な面持ちで臨んでいました。



まが玉作りを体験中

3日目、4日目は資料の取扱いや IPM(総合的有害生物管理)の作業を行いました。資料の取扱いは掛軸や巻子の取扱い、土器の梱包、民具の取扱いと学習プログラムの考案など多分野の資料を取扱います。実習生の中には、初めて触ったという人もおり、緊張感のある実習となりました。

IPMに関して、大学の座学で学んだという実習生は多かったのですが、具体的にどのようなことを行っているか体験したことのある実習生は少なく、印象に強く残った実習となったようです。

IPM には様々な業務がありますが、実習生が体験したのは、何万点とある資料をリストと照会し、1点1点埃を

払うという地道な作業です。地道で根気のいる作業に驚いている実習生が多かったです。



掛軸の取扱い実習

5日目、6日目は博物館実習のメインイベントともいえる展示実習です。

5人1班で与えられた資料で展示のコンセプトを考え、キャプションやパネルを作成し、実際に資料を展示する実習を1日半かけて行いました。初めて見る資料、自分の専門外の資料で展示を短時間で完成させなくてはならないため、どの班も最初は苦労していましたが、それぞれがアイデアを出し合って、無事に展示を完成させていました。



展示作業中

大学で行う予定だった展示の実習が大学の休校に伴って打ち切りになったり、展示の実習そのものが出来なかった実習生も多く、当館での実習が少しでも実習生のためになっていたら嬉しく思います。実習もレポートも熱心に取り組んでいる姿が印象的で、実習担当も身が引き締まる思いでした。

(企画担当 倉澤麻由子)

博物館の空調設備 四方山話

様々な資料を展示・保管している当館ですが、実は昭和46年(1971)の開館当初には空調設備がありませんでした。初代の空調熱源システムは、ヒートポンプチラーと 330 m³の蓄熱槽で構成され、その後昭和60年(1985)にガス焚冷温水発生機に更新されました。経年劣化により機能が低下したため、機能改善のため、平成21年(2009)にヒートポンプチラーと既存の蓄熱槽に氷蓄熱槽を加えた、ガスや水道を使用しない、安全でランニングコストを抑えられた現行のシステムとなりました。昭和60年次のシステムから平成21年次のシステムにしたところ、光熱水費ベースで約 69%もの削減に成功したそうです。

さて、一般的に空調設備は2種類に大別することができます。1つが個別空調方式による空調設備、もう1つが中央熱源方式による空調設備です。個別空調方式については、一般家庭で使用されているルームエアコンなどが該当します。学校や事務所などでもよく使用される個別空調方式の空調設備は、設定するエリアが細かく分かれている場合や、部屋単位での使用率が異なる場合などでメリットが大きい空調方式です。個々の単位で設定することが可能で、臨機応変に対応することができます。

当館で使用しているのは、中央熱源方式の空調設備です。中央熱源方式では、熱源機器を集中させて、屋外に設置します。そこから冷水(もしくは温水)などを巡らせ、空調機器に送っています。メリットとしては、機器を集中させて設置することから、省スペースに設置できることが挙げられます。デメリットとして、細かく設定することができないため、施設用途によって向き不向きがあります。当館では広い観覧エリアを細かく分けて空調する必要性がないので、中央熱源方式によるメリットを大きく享受することができます。

当館の空調設備は2つの蓄熱槽を備えています。そのメリットが電力消費量のピークカットへの貢献です。夜間に空調機器を運転させて蓄熱槽に熱をたくわえ、昼にその熱を放出することで、当館全体の空調を実施しています。空調機器が屋外との熱交換で消費する電気エネ



当館の中央熱源空調機器

ルギーはとても大きいので、昼の電力消費量を大きく抑えられるという仕組みになっています。

昼に電力消費量を抑えることがなぜメリットと言えるのか、ややわかりにくいかもしれません。近年夏や冬になると、日本全国での昼の電力消費量が最大生産量に近づき、電力会社からは節電の啓発活動がよく行われるようになります。そんな中、当館では広い展示空間の空調や照明設備のため、年間約 100 万千瓦ワットもの電気を使用しています。一般家庭が月に使用する電力量は約 248.7 キロワット(東京電力ホールディングスHPより、平成25年(2013)実績値)なので、約335世帯分の電力を使用していることになります。膨大な電力を消費する当館で、出力の大きい空調設備が昼に使用する電力消費量を抑えることができる、と聞くとなんとなくメリットとして感じられるのではないのでしょうか。

例年であれば、『博物館裏方探検隊』というイベントを開催していました。こういった空調設備をはじめとした、当館の裏方についてご覧いただける貴重な機会でした。残念なことに、昨今の新型コロナウイルス(COVID-19)の影響を受け、実施の見通しが立っていません。ワクチン接種も行われていますが、変異種の出現など懸念は尽きず、落ち着いた日々となっています。かつての賑わいが戻り、皆様に何ら憂いなく当館をご利用いただける、そんな日が早々に戻ってくることを願っています。

(施設担当 若林 和弘)